

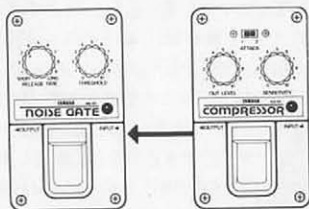
METHOD OF EFFECTOR SYSTEM

エフェクターシステムの組み立て方・考え方

A エフェクトを組み合わせる時の基本ルール。

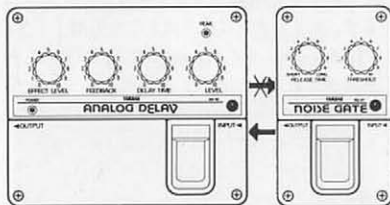
RULE 1

コンプレッサーの後のノイズゲートは慎重に。コンプレッサーはサステイン効果をつくと同時にノイズも増幅します。そこで後にノイズゲートを接続しますが、両エフェクターのコントロールノブのセッティングに十分な注意が必要です。例えば、コンプレッサーのOUT LEVELに対しノイズゲートのTHRESHOLDを下げ過ぎると、ノイズによってゲートが開き効果がありません。逆に上げ過ぎるとサステイン効果が損なわれます。RELEASE TIMEを長くセットし過ぎると音が消える直前にノイズが聴こえてしまいますし、逆に、短か過ぎても途中でブツリ音が途切れてしまいます。実際に音を出しながら慎重に調整しましょう。



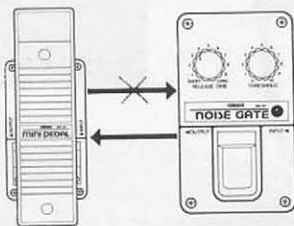
RULE 2

アナログディレイ後のノイズゲートは要注意。アナログディレイをロングディレイにセットしてエコー効果をつくる場合、アナログディレイの後にノイズゲートをおくと、ディレイ音にノイズゲートが働いてディレイ音が消されてしまう恐れがあります。ノイズゲートはできるだけアナログディレイの直前に接続しましょう。



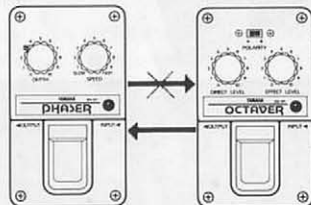
RULE 3

ミニペダルの機能を奪うエフェクターに注意。ミニペダルの後にコンプレッサー、リミッター、ノイズゲートを接続した場合には、ミニペダルによるなめらかな音量変化が損なわれがちです。特に、コンプレッサーのSENSITIVITY、リミッター、ノイズゲートのTHRESHOLDが極端に上がっている場合は、微妙な音量コントロールが不可能になり、ボリューム奏法や小さな音量での演奏に支障をきたす恐れもあります。ミニペダルは、なるべくリミッターやコンプレッサーより後に接続するようにしましょう。



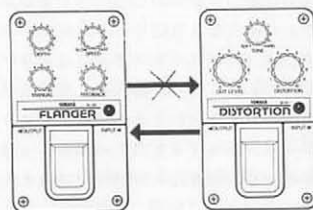
RULE 4

オクターヴァーの追従性を殺すエフェクター。オクターヴァーによってクリアなローオクターヴ音を得るためには、入力信号をなるべくクリアな状態にしておく必要があります。オクターヴァーの前に、フェイザー、コーラス、フランジャー、アナログディレイ、ディストーションなどを接続すると、倍音が増えたりピッチが変動したりするため誤動作の原因となります。オクターヴァーは必ず上記のような音色変化の得られるエフェクターの前に接続します。



RULE 5

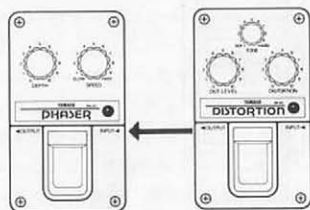
トレモロ系エフェクトを殺すディストーション。フェイザー、コーラスなどのトレモロ系エフェクターは、それぞれ特有の微妙な音色変化を持っています。ところがディストーションなど、音を歪ませ強制的に音色を大きく変えてしまうエフェクターの音色変化が消し飛ぶ恐れがあります。ディストーションはなるべくトレモロ系エフェクターの前に使用しましょう。



B エフェクトを組み合わせるためのアイデア。

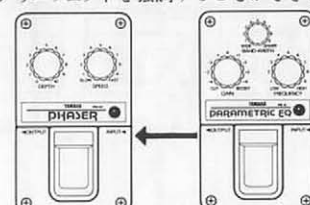
IDEA 1

トレモロ系のエフェクト音を強調する方法①。トレモロ系のエフェクターであるフェイザー、コーラス、フランジャーには、倍音の構成を変化させるフィルター効果があります。ディストーションやトーンブースターを前に接続して音を歪ませれば、倍音を増やすことができますからエフェクトを強調することが可能です。



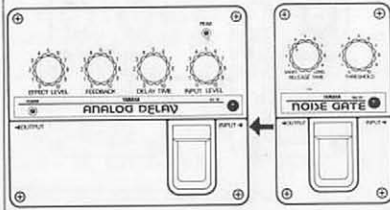
IDEA 2

トレモロ系のエフェクト音を強調する方法②。トレモロ系のエフェクターであるフェイザー、コーラス、フランジャーには、倍音の構成を変化させるフィルター効果があります。パラメトリックEQやトーンブースターを前に接続して中高域を持ち上げてやれば、倍音が増えやすからエフェクトを強調することができます。



IDEA 3

ディレイ音をよりクリアで効果的にする方法。アナログディレイによるディレイ音をよりクリアにしたい場合は、ノイズに対してディレイが働き濁りのある残響効果となるのを防ぐ意味で、アナログディレイの前にノイズゲートを接続します。特に、アナログディレイの前にエフェクターを多用した場合には効果があります。



IDEA 4

オクターヴァーの効果を確実にとりだす方法。オクターヴァーのローオクターヴ音をクリアに出すためには、原音の音量のばらつきを少なくする必要があります。コンプレッサーやリミッターをオクターヴァーの前に接続すれば、オクターヴァーへの入力レベルを一定にでき、確実なオクターヴァーの動作を引き出せます。

